

淨土教の思想を学ぶ大学の授業で毎年ある絵本を読み聞かせている。授業の題材は中国浄土教の祖師である曇鸞大師の伝記の一場面である。

若い頃から仏教や古典に親しんでいた曇鸞は、五〇歳を過ぎて研究し始めた經典がとても難解で、志半ばで病を患ってしまう。さらに、そもそも病が癒えても生命には限りがあると気づき、それならばと長生不死の術で著名な道士のもとを訪ねて修行を重ね、ついにその奥義を記した仙経を伝授された。

郷土への帰り道で洛陽の都に立ち寄り、インドから來たばかりの三藏法師・菩提流支と運命的な出会いを果たす。曇鸞が「仏教の教えの中に仙経よりすぐれた長生不死の法はあるのか」と尋ねると、菩提流支は唾を地面に吐き捨てて「比べるどころではない。長生の法といつても、しばらく死なないだけで、結局は輪廻転生を繰り返すのだ。しかし、この仏典の偉大な教えによれば、そなたは死の恐怖から逃れることができるだろう」と答えて『觀無量寿經』を手渡した。その言葉に感服した曇鸞は仙経を焼き捨てて、浄土教に帰依したという。浄土教の魅力がギュッと詰めこまれた右のエピソードに読み合わせている絵本が、佐野洋子作・絵『一〇〇万回生きたねこ』である。幼い頃に手にとった記憶がある方も多いのではないだろうか。

物語の前半は虎猫と一〇〇万人の飼い主たちとのエピソードが繰り返される。飼い主たちは虎猫との死別を嘆いたが、虎猫はどの飼い主のことも大嫌いで悲

工藤量導

おこること全てが自分の結果なら
もう僕はなんにも拘んだりはしないよ
もう僕は誰かのせいになんかしないよ
もう僕は誰かを恨んだりはできないよ
時間が心を癒す事も知ったから
もう僕はすぐに諦めたりしないよ
結局人は一人になれないなら
もう僕はずっと君といろよ
もう僕の中の恐怖が消えないなら
もう僕はずっと君といろよ

(あぶらすまし「もう僕は終わりを考えたりしない」)

一〇〇万回の生を超えて

OP-1
山風
かく

微

風

吹

動

くどう りょうどう 1980年青森県今別町生まれ。青森教区本覚寺副住職。博士（仏教学）。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師。淑徳大学兼任講師。専門は中国浄土教、著書に『迦才『浄土論』と中国浄土教—凡夫化土往生説の思想形成』（法藏館、2013年）など。

しむこともなく、一〇〇万回死んで、一〇〇万回生きかえった。後半は銅い主のない野良猫となつて白猫と出会う。虎猫は白猫に心惹かれて「そばにいてもいいかい」と伝える。二匹はたくさんの子猫を生み育て、虎猫はいつまでも白猫と一緒にいたいと願う。しかしある日、白猫は死んでしまう。虎猫は動かなくなつた白猫を抱いて心から涙する。大事にしてくれた銅い主たちの辛さにはじめて共感できたからであろうか、さらに一〇〇万回泣いた後に虎猫は動かなくなつた。物語は「ねこはもう、けつして生きかえりませんでした」と結ばれる。生と死と愛、そして真の幸せとは何かを問うロマンティックな作品だ。

この物語を仏教的に解釈すれば、一〇〇万回の生死は「輪廻転生」の繰り返しであり、そこからの開放が「解脱」であり、死の超克を目指す「涅槃」の教えとなる。『觀無量寿經』の文脈では、善知識（白猫）の助言によつて極悪人（虎猫）が念佛往生する場面がちようどこの物語と折り重なるだろう。そう読めば虎猫は何ら特別な存在ではなく、私たちに通ずる姿もある。ただ、虎猫は前世の記憶を保持して、生まれ変わりを謡歌している点が異色かもしれない。

同様の構図で冒頭の曇鸞のエピソードも考えてみよう。虎猫は長生術を求めて旅に出た曇鸞であり、白猫たるベストパートナーは劇的に出会つた菩提流支：ではなくて、この場合は『觀無量寿經』の教えの方が適切だろうか。淨土往生の教えは、現世でのカレンダーのような直線的な有時間モデル（長生の命）

から、来世の極楽淨土での円環的な無時間モデル（永遠の命）への転換を導き、そこに眞の幸せがあると説く。だから厭離穢土欣求淨土なのだ。

かくして曇鸞も、虎猫も、運命の岐路に立たされた。結果を俯瞰できる私たち読者の目からみれば「どちらがより幸せか」、その選択はたやすい。しかし、主体的な視野から眺めると、自らが長年親しみ馴染んできた常識をモデルチエンジするのは、それこそ清水の舞台から飛び降りるような覚悟が必要である。はたしてどれほどの恐怖を伴うものであろうか。

曇鸞にとつては現世での生命の終結が、虎猫にとつては一〇〇万回の生まれ変わりの断絶がとてもなく怖かったのではないかと思う。一方、現状のままであり続けることにもどこか一株の不安を抱えていたのだろう。彼らはそれぞれの出会いを通じて、恐怖と共に生きる術を見出してゆくのだ。その思いにしばし想像を寄せてみたい。

「もう僕は終わりを考えたりしない」。おこることを全てを受け入れ、何かを拒んだり、誰かを恨んだり、すぐに諦めたりすることもない穏やかな境地。それでも、恐怖がたちまちに消えることはないかもしない。だからこそ「君」というパートナーを信じて共に踏み出すことを選択した。歩みを振り返つてみれば、確かにあれこそ幸せの分岐点だったのだ。